

プロローグ——探偵と刑事

利発^{りはつ}さの中に、まだ微^{かす}かに幼さを残した探偵は言う。

千里 「あなたが犯人だったんですね。石川^{いしかわ}さん」

石川 「流石ね……可愛い探偵さん。でも、私が女性だからといって、二人きりになったのは不用心だったんじゃないかしら」

対峙^{たいじ}する女性、石川は不敵^{ふてき}に笑うと、スカートの中からナイフを取り出して千里^{せんり}の喉元^{のどもと}に突き付ける。

石川 「お利口^{りくわい}さんなのに知らなかったのね。口は 禍^{わざわい} の元よ。
悪く思わないでね、探偵さん」

千里 「認めるんですね。自分が犯人だって」

石川 「ええ、そうよ。あなたもあいつらのところに送ってあげる」

ナイフが振り下ろされる。その直前、銃声^{とどろ}が轟いた。

銃弾がナイフを吹き飛ばし、その衝撃で石川が腕を抑えていると、二人きりだった部屋に刑事達^かが駆け込んでくる。

千里 「知らなかったんですか？ 口は 禍^{わざわい} の元、ですよ」

犯人が取り押さえられるのを横目に、千里は部屋を抜け出して、コの字型の館の向かいの部屋へと向かう。銃弾が放たれた部屋だ。

そこに、千里の一番信頼する人物がいた。

東郷 「まったく、また無茶な計画を立てて」

千里 「仕方ないじゃないですか。サイコメトリーで犯人はわかりましたけど、証拠がなかったんですから」

サイコメトリー。
残留思念を読むこと。

御船家^{みふね}の人間は代々、様々な思念^{しねん}を読む力を持っていたという。
その中でも千里^{いのう}の異能は、死と破壊に関わる思念を読むことだった。

誰かが殺人を犯せば、その現場には犯行時の思念^{イメージ}が残る。何故、そしてどのように殺したのか。そんな情報を、千里は犯行現場に立つだけで読み取ることができるのだ。

しかし、この力には欠点もあった。サイコメトリーで得た情報は、法的な証拠にはならない。千里にしか見えないからだ。

だから今回の事件では、犯人がわかった後も、わざと隙^{すき}を見せて
自白を引き出す必要があった。

東郷 「それにしたって、もっと安全な方法があったんじゃないか？」

千里 「もう少し時間があれば、違う作戦もあったんですが。今回は
犯人がいつ次の犯行に出るかわからなかったのです。それに」

東郷 「それに？」

千里 「絶対に守ってくれるって、信じてましたから」

千里は東郷^{とうごう}がいた窓際に近付いていく。

東郷が銃を撃ったときに立っていた場所だ。

【サイコメトリーが発動】する条件は2つ。

- 死と破壊を引き起こした本人に明確な自覚があったこと
- 死と破壊を引き起こした本人がいた場所に立つこと

明確な自覚とは、殺してやる・壊してやるという意図。それから、
殺してしまうかも・壊してしまうかもという恐怖だ。

だからこの場所には、東郷の思念が残っているはずだった。

千里が窓際に立つと、^{イメージ}思念が流れ込んでくる。

銃を握る手が震える。もし狙いが少しでも外れれば、この手で千里を撃ち抜いてしまうかもしれない。

冷静になれ、と自分に言い聞かせる。

千里と初めて会ったとき、まだ中学生だった千里に、その力で事件を解決してくれと頼んだのは自分だ。そのときからずっと、千里は自分の願いに^{こた}え続けてくれている。

だから、自分は自分の^{つと}務めを果たそう。千里が事件を解決するならば、自分はどんな犯罪者にも千里を傷付けさせはしない。千里は絶対に守る。

手の震えが消える。引き金を引く。

東郷は引き金を引くとき、狙いを外したら千里を撃ち殺してしまうかもしれないと恐れていた。千里のサイコメトリーは、その恐怖に反応したのだ。

東郷 「どうした？ 急に黙り込んで」

千里 「いえ、ちょっと昔のことを思い出しちゃって」

東郷にとって千里が恩人であるように、千里にとっては東郷が恩人だった。あの日、一族の中でも忌み嫌われていた死と破壊に^{まつ}纏わる千里の力に、探偵という使い道を見つけてくれたのだから。

プロローグ2——トレジャーツアー

2002年——夏。目の前には青い海と空が広がっている。

千里と東郷は、伊豆諸島の西端、神津島の岬にいた。

千里 「急な話だったのに、来てくれてありがとうございます」

そもそも千里は、叔父の発案で、一緒に伊豆の孤島に泊まるツアーに参加することになっていた。しかし3日前、その叔父が急に蒸発してしまったのだ。

東郷 「で、大丈夫なのか？ その叔父さんとやらは」

千里 「まあ、叔父がいなくなるのは珍しいことではないので。心配はいらない、って書き置きもありましたし」

状況から察するに、どうも叔父は借金取りから逃げるために姿をくらましたらしい。

厄介なのは、書き置きの最後の一文だった。お前だけでもツアーに参加し、埋蔵金を見つけてくれ、と書いてあったのだ。

未成年だけのツアー参加はできず、親戚に頼んでみたが都合が付かないと断られ、最後には東郷を頼ることになった。

東郷 「トレジャーツアー、っていうんだったか？」

千里 「はい。これから向かう泰端島には、タイタンの遺産と呼ばれる埋蔵金が隠されている、という噂があって。今回のツアーは一応、皆でその埋蔵金を見つけようって目的なんです」

東郷 「タイタンの遺産、か。どういうものなんだ？」

千里 「それがよくわからないんですね、いろんな噂があって……」

2人が話していると、後ろから声を掛けられた。

振り返れば、アロハシャツ姿の男性が立っている。

持田「あんたらもツアーの参加者かいな。わいは持田、トレジャーハンターをやっとる。よろしゅうな。で、タイタンの遺産はな、江戸時代に周防泰山すおうたいざんが貿易で稼いだ、大量の大判小判おおばんこばんやと言われとる」

持田が言うには、泰端島では珍しい鉱石こうせきが採れたのだという。当時は佐渡金山さどきんざん、石見銀山いわみぎんざんに並ぶ採掘場さいくつじょうだったそう。

そして江戸時代、泰端島の持ち主であった周防泰山は、鉱石を売って荒稼ぎし、死ぬ前に稼いだ大判小判を島のどこかに隠した。そんな噂が残っているらしい。

話を聞いていると、また声を掛けられる。スーツ姿の女性だ。

三根「でも江戸の終わりに泰端島の採掘資源は尽きて、しばらくは全く注目されていなかったのよね。その状況が変わったのが今から30年前の1972年。周防泰山すおうたいざんが妾めかけに送った手紙が見つかって、そこに『タイタンの遺産』の文字が出てくるの。あ、紹介が遅れたわね。私は三根みね。雑誌記者よ」

三根が言うには、しばらくは埋蔵金ブームとなり、多くの人が泰端島を訪れたそう。しかし誰も手掛かりすら得られず、埋蔵金ブームは下火したびとなった。今では島を訪れる人も滅多めったにいないという。

千里「……良く知らないんですが、埋蔵金というのは、どれくらいの価値があるんですか？」

千里の質問に答えたのは、20過ぎの和服姿の女性だった。

隣には丸眼鏡を掛けた線の細い男性も立っている。

西園寺 「もし本当に大判小判が見つければ、1億円はくだらないでしょう。1963年に見つかった豪商・鹿島屋ごうしょう かしまやの埋蔵金は、10億近い値がつけましたから。申し遅れました、古物商こぶつしょうを営んでおります、西園寺さいおんじと申します」

柳 「埋蔵金の他にも、泰端島には面白い逸話いつわがあるんですよ。島には人手ひとでで運んだとは思えないほどの巨岩がごろごろして、これは巨人が運んだものだっていうんです。僕はやなぎ柳、民俗学者です」

岬にはいつの間にか、ツアーの参加者全員が揃っていた。そこにクルーザーがエンジン音を響かせて近付いてくる。

クルーザーから降りてきたのは、力士りきしかというほどの巨漢きょかんだった。聞けば、本当に元力士なのだという。

大ノ山おおのやま 「大ノ山です。いつも泰端島で夏の間だけペンションのオーナーをやっているんですが、今回ちょっと事情があって、トレジャーツアーを主催しゅさいさせてもらいました」

参加者が船に乗り込むと、大ノ山は一度止めたエンジンを付けようとして、小さく自分の頭を叩いた。

大ノ山 「この船おんぼろで、配線いじらんと稼働せんのですわ」

大ノ山はその巨体を【狭い整備室】に押し込み、しばらくすると汗まみれで戻ってきて、泰端島に向けてクルーザーを発進させた。